

タイでの日本語教師奮闘記

嶋野 桂

ミネソタ ケネディー高校日本語 TA

1. タイとの出会い

2007年、大学3年のときに夏休みを利用して初めてタイへ行きました。インターネットで日本語会話のボランティアの募集を見つけたのがきっかけです。募集要項には経験不問、住居・食事付きとあり、現地の学生と共同生活をして日本語の練習相手になるという内容。大学やNGO主催ではなく個人的なものだったので、不安もありましたが好奇心が勝ち、応募したところ、募集要項にあった面接もなくすぐに採用。あれよあれよという間にタイ行きが決まりました。自分で航空券を買い、荷造りし、一人で空港へ行き...、と何もかも初めてのことでした。

小学校のころにユニセフの冊子を読み、世界の生活レベルの格差にショックを受けたのが私の開発途上国への関心の始まりです。大学では経済開発論のゼミに属し、いつか実際に途上国に行ってみたいと思っていました。

格安航空券だったので北京で乗り換え。かなりの待ち時間があつたと記憶しています。ようやくバンコクのスワンナプーム空港に着いたのは深夜でした。この新しい現代的な空港は、私のタイという国のイメージから全くかけ離れたものでした。空港で夜を明かし、窓ガラスのないバスとトゥクトゥクを乗り継いで北バス・ターミナルへ。このときは空港と市内を結ぶエアポート・リンクがまだ開通していませんでした。右も左も、言葉もわからない場所でなんとかしたのは、助けてくれた人々のおかげです。目的地はタイで最も貧しいと言われている東北地方。北バス・ターミナルから長距離バスに乗り約7時間。ようやくコンケンのバス・ターミナルに着いたのは日本を出てから24時間以上経った、暑いタイの昼下がりでした。

この夏の3週間のことを書けば、それだけで何ページも使ってしまうほど、濃く、充実した時間でした。会う人会う人がみな親切で、生き生きとしていました。虫もヤモリも多く、トイレトペーパーを使わないお手洗いなど、快適な生活環境ではありませんでした。それでも私の描いていた途上国に対するイメージを払拭する「明るさ」が満ちあふれていました。居心地がよかったです。初めて出会う人たちなのに、なぜか信頼できて、気付いたらタイに恋していました。

2. 日本語教師に

こうしてタイが忘れられなくなった私は、英語を猛勉強し、2008年の8月からタイのタマサート大学に交換留学するチャンスを掴みました。留学した10ヶ月間は本当にいろいろなことを経験す

ることができ、ますますタイが好きになりました。そして、あの夏の日本語会話ボランティアと、留学中に何度か恵まれた日本語を教える機会でのやり甲斐が忘れられず、大学卒業後は日本語教師になる決心をしました。

タイ人にとって、日本語を話すことができれば仕事のチャンスがぐんと広がります。給料アップも期待できます。お世話になった、すてきな時間を過ごさせてくれたタイの人たちに、日本語を教えるというかたちでお礼ができると思いました。日本語教育能力検定試験に合格し、晴れて日本語教師の資格を得た私は、もちろんタイでの仕事を希望しました。

幸運なことに、留学中に知り合った日本人女性の紹介で、まずはコンケンにあるT学校でお世話になることが決まりました。初めてのタイもコンケン、初めて働くのもコンケン。なにか不思議な縁を感じました。タイの新学期は5月に始まります。2010年3月に大学を卒業し、すぐにタイへ向かいました。1年で最も暑いタイの4月。コンケンは私が留学していたバンコクよりもさらに暑く、体に湿疹ができてしまいました。

T学校は5年制の高等専門学校で、学生たちは機械、電気、会計などを専門に学んでいます。コンケン市から離れた、田舎の学校です。学生たちは素朴で、勉強はきらいで、のんびりとした雰囲気漂う教室。私立ですが学校の設備が整っておらず、風の通らない、扇風機の壊れた教室で、年代物の黒板を使つての授業でした。ここで私は約4ヶ月間お世話になりました。校長先生のお考えで、ここの学生たちは英語はもちろん、中国語と日本語も必修で勉強しなければなりません。この学校の卒業生で、日本に留学経験のある6名の先生方が日本語の指導にあたっていました。私はそのうちの3名の先生とチーム・ティーチングをすることになりました。主に発音指導担当でした。

同年代の先生方と、学生について、授業について、将来について、いろいろなことを語り合いました。楽しい時間でした。一番の課題は学生の日本語学習に対する動機付け。必修科目なので、興味のない学生たちも勉強しなければなりません。現在教えているアメリカの高校にはインターネットもスマートボードもなんでも揃っています。でもT学校の教室には古い黒板が一枚あるだけでした。そんな環境で、時にゲームや歌で雰囲気を盛り上げ、なんとか学生たちに日本語に興味を持ってもらおうと努力しました。また、日本語が話せればタイに多くある日系企業で働くチャンスがあるということも伝えていましたが、残念ながらT学校の学生たちにとってはそんな話は夢のまた夢、という様子でした。留学していたタマサート大学の日本語専攻の学生たちは、現実感たっぷりにトヨタで、JAL(日本航空)で働きたい、などと話していたのですが。

3. バンコクでの新生活

T学校をあとにし、2010年9月からバンコク、スクムビット通りのはずれにあるB語学学校で教えることになりました。タイに初めて行ったときにお世話になった語学学校の先生の学校です。ここの学生は最低3ヶ月間、日本語を学んだあと、日本へ技術実習生として働きに行きます。みなタイの東北や北部の出身で、日本で働くためにかなり大きな額のお金を払って来ている人たちでした。学校の近くの寮で自炊の共同生活をし、それこそ朝から晩まで、一日中日本語を勉強します。

彼らの日本語学習に対する動機は明確で、みな必死に日本語を勉強していました。もともと田舎ののんびりした人たちなので、あの生活はかなりきつかったらうと思います。日本で十数年働いていたタイ人の校長先生が、日本仕込の厳しさを学生たちを叱咤激励していましたが、なかには諦めて田舎へ帰ってしまう学生もいました。18歳から35歳ぐらいまでの学生たちがお互いに励まし合いながら頑張っていました。

ここでは日本語教師が足りず、私も一日6時間以上教え、授業のあとも学生の自習の手伝いや遅れがちな学生のサポート、そして授業の準備があり、日々があっという間に過ぎていきました。いかに短期間に、日本で生活するのに困らない程度の日本語、また工場で働くための専門用語を身に付けさせるかがこの学校での課題でした。ここで私が教えた学生たちは、今日本で技術実習生として働いています。Facebookで彼らの充実した様子を見かける度に、嬉しくなります。

たいてい昼ごはんは、彼らで作って来るイサーン(東北)料理と一緒に食べていました。ソムタム(青パパイヤのサラダ)、ゲーン(カレー/スープ)、カイジアオ(卵焼き)。これらはタイの家庭料理です。毎日この昼ごはんが楽しみでした。私のこの学校での最後の日、お返しにお好み焼きを振舞いました。食べ慣れない味に反応はそれぞれでしたが、みな喜んでくれました。この学校で、私は働くということを知り、鍛えられたように思います。

4. ラッチャブリーへ

2011年1月、些細なことからB語学学校で仕事を続けることができなくなり、仕事を探していたとき、顔馴染みの雑貨屋のおばさんから、ラッチャブリーの国立中高一貫校R学校で日本語を教えているという話を聞きました。早速、おばさんの知り合いの先生を通してR学校に連絡を取り、履歴書と模擬授業を見てもらえることになりました。タマサート大学に留学していたときに、タイ経済の講義で、ある教授が、タイではノウハウ(know how)ではなくノウフー(know who)が成功する鍵だと話していたことが思い出されました。大学を卒業してからの1年間、仕事を得ることができたのは、毎回誰かのおかげでした。

無事履歴書と模擬授業をパスし、R学校で働けることになったときはほっとしました。国立の学校なので契約書もあり、これまでよりも安定した組織だという印象でした。タイの学校の年度末は3月。働くことが決まったのは2月だったので、新学期が始まるまでの間、日本に帰国することにしました。いろいろなことのある1年間でした。

5月に学校へ行くと、2月の模擬授業のときに会った3人の日本語の先生のうち、2人があと2週間でR学校を辞めるということを知られました。バンコクで公務員の教師になるとの話でした。国立の学校といっても先生全員が公務員というわけではなく、公務員の募集の少ない外国語や、大学を出たばかりの先生たちは非常勤で勤めるほうが多いのです。公務員の初任給は非常勤講師よりも安いのですが、なにより安定していますし、少しずつではあっても昇給するので、公務員はタイで人気の職業のひとつです。

突然R学校での経験を持つ先生が2人も辞めることになり、残されたR学校2年目の先生と私は正直言って、とても焦りました。学校を私情で辞めるには引継ぎの先生を自力で探す約束なので、新しい先生が2人、早速来てくれたのですが、2人ももまだ学生で、大学へ行きながらR学校に教

えに来ることになりました。タイらしい、柔軟な対応です。フレッシュなメンバーでの新学期がスタート。私を含め、みな日本語教育経験の浅い先生たちでしたが、試行錯誤しながら生徒たちのために頑張りました。R学校2年目の先生は、彼女もまだ分からないことばかりだったはずですが、学校の雑務から授業のことまで一手に引き受け、大変だったと思います。でも持ち前の明るさと面倒見のよさで、頼りになる同僚でした。

ラチャブリーの公立学校の中では進学校のR学校。英語以外の外国語は選択科目で、日本語のほかに中国語とフランス語が選べます。一番人気は中国語、次が日本語です。タイの子どもは日本の子どもよりも3学年ぐらい幼い感じがします。日本語クラスの中学生たちは体格も行動も小学生のよう。かわいいのですが、クラス運営がとても大変でした。英語のアルファベットが身に付いていない生徒が多く、ひらがなが定着するまでの間、ローマ字も通用せず、難しく感じました。また学校は生徒を進学校に入れたいがために、試験に落ちたにもかかわらず袖の下で入学を許された生徒も少なからずおり、タイの汚職の多さを目の当たりにしました。それでも高校生になるとだいぶ落ち着いて、日本語をずいぶん使える子もいました。私が教えていた高校3年生のうち数人は、大学でも日本語を専攻しています。将来、彼らが日本語を使う仕事に就けることを願っています。

タイの子どもは良くも悪くも友人に協力的で、宿題も授業中も、テストまでもお互いに助け合っ
てしまいます。そのおかげでできない子はいつもできる子を頼りにし、なかなか自分で勉強しませ
ん。授業中のおしゃべりも多くなってしまいます。それは日本語に限ったことではなく、どの教科
でもそうで、朝早く学校に来てノートを写し合っている姿は微笑ましくもあるのですが...、困りま
す。R学校での課題もやはり勉強の動機付けでした。選択科目とは言え、あくまで3つから選ばな
ければならない1つなので、日本語に興味がない生徒も多く見られました。しかし、多くの生徒が
ドラえもんをはじめとした、日本のアニメを見て育っているので、なんとか日本語を楽しんでくれ
ているようでした。教室の設備は、インターネットはあるようでないようなもの。また、大きい音
の出るラジカセやスピーカーもなく、リスニング・スピーキングを担当していた私としては教えに
くい環境でした。今、アメリカでハイテクな教室にいと、タイとのギャップにため息が出ます。

5. アメリカ行きの決心

R学校ではひとりで授業を計画し、教えることがほとんどでした。うまくいくことも、いかない
こともありました。R学校での1年を通して、私は、自分にはクラス・マネジメントが苦手だとわ
かりました。また、西洋の教育現場に興味も持っていました。タマサート大学には同じ時期にアメ
リカやヨーロッパからも多くの学生が留学していましたが、彼らの講義に参加する姿勢(積極的に
発言する。いつも自信に満ちているように見える。無闇に群れない、etc.)が日本の私たち、またタ
イ人学生とは明らかに違っていました。何が彼らをそうさせるのだろうか。初中等教育でどのよう
な教育を受けているのだろうか。是非、見てみたいと思いました。

そんなことを考えていた矢先に、国際交流基金がアメリカへ派遣する日本語教師のTAを募集し
ていることを知り、迷った末、応募しました。合格が決まってからも行くかどうか迷いました。タ
イの人たちにお礼がしたくて日本語教師になったにもかかわらず、まだタイで2年しか教えていな
かったからです。しかし、アメリカでTAをすることは、将来タイで日本語を教え続けることに必

ずプラスになるという考えに至り、現在ミネソタに派遣されています。最長2年のプログラムなので、派遣期間を終えた後は、またタイに戻るつもりであります。

6. おわりに

近年、タイでは中等教育段階での日本語教育が拡大傾向にあります。タイの教育省の方針によるものですが、その背景にはタイでの日本語需要の拡大があるからではないでしょうか。国際交流基金の2009年の調査によると、タイの中等教育機関での日本語学習者数は42,400人。それに対して教師数は415人で、教師一人当たりの学習者数は約102人になるそうです。高等教育機関に比べ、タイの中等教育機関の日本語教育はまだまだ発展途上です。きちんとしたスタンダード、システム、ネットワーク、ある程度の設備、そしてやる気のある教師が必要です。今回書かせていただいたこの個人的な新米日本語教師の記録が、今後のタイにおける日本語教育の発展にほんの少しでも役立てればと願っています。